

特別対談

僕らはこんな映画を観てきた 僕らはこんな映画を観てきた

平川克美

ひらかわ・かつみ ●一九五〇年東京都生まれ。文筆家。喫茶店「隣町珈琲」店主、立教大学客員教授、ラジオデイス特別顧問。『路地裏で考える 世界の饒古さに抵抗する拠点』（ちくま新書）、『21世紀の楳戸幻想論 その日暮らしの哲学』（ミシマ社）など著作多数。

内田 樹

うちだ・たつる ●一九五〇年東京都生まれ。思想家、武道家。神戸女学院大学名誉教授、京都精華大学客員教授、凱風館館長。『生きつらさについて考える』（毎日新聞出版）、『そのうちなんとかなるだろう』（マガジンハウス）など著作多数。

娯楽としての映画、深く刺さる映画

平川 今回の特集は、表題としては「生涯の一本」なんだけど、考えてみると、生涯の一本を決めるなんて、ほとんど不可能な話でさ。だから、「青春の「コマ」」「人生を変えた一本」みたいな、もう少しいろいろな角度の切り口があってもいいんです。

で、まずは、いちばん初めに観た映画とか、内田君の個人史的なところを聞いておこうかと。僕の場合、中学校のころに毎日やっていた「テレビ名画座」で観た『さよならをもう一度』（一九六二）が、初めて映画つてものを意識的に見るようになったきっかけだった。イングリッド・バーグマンが恋人のアンソニー・パーキンスより年上で、あれで年上の女性に対する恋愛感情というものが芽生えちゃった。「私はもうおばあちゃんなのよ」って言って年若い恋人を遠ざけようとするバーグマンの切ない演技が良くて（笑）。

内田 「テレビ名画座」は、僕もよく見た。あれで映画に目覚めた人って、僕らの世代では多いんじゃないかな。

平川 自分から映画館に行って観た、最初の映画というところ？

内田 たぶん、『シエーン』（一九五三）と『駅馬車』（一九三九）の二本立て。封切りからずいぶん経ってたんだらうけど、本当に面白かった。ロードショーなんて、ずいぶん後になるまで行ったことなかった。

平川 自発的に観に行った映画で面白いと思っただのは、僕も『シエーン』なんです。ロードショーは、『これがシネラマだ』（一九五五）が最初かな。父親に連れて行ってもらったな。

内田 最初のシネラマは帝劇で観たマーロン・ブランド主演の『戦艦バウンティ』（一九六二）だったんじゃないかな。『アラビアのロレンス』（一九六二）も帝劇の天井敷で観たな。

平川 そのころの映画は、娯楽として観ていた？

内田 もちろん、映画は娯楽の王者だったんじゃない？ 少なくとも僕にとってはそうだった。中学生のころも映画はよく観たよ。定期試験が終わった後とかに、よく君の名前をダシに使って、「平川君ち行ってきま〜す」って言って、鶺鴒の木の安楽座に行ってた（笑）。僕はその頃、大映映画が大好きでね。『忍びの

者』（一九六二）、『座頭市』（一九六二）、『眠狂四郎』（一九六三）、田宮二郎の『犬』シリーズ（一九六四〜六七）とか。大映映画は日活や東宝と違って、映像にずしりと重量感があって。後から考えたら、撮影は宮川一夫だったんだよね。

平川 あのころは、大映、東宝、日活、東映、松竹の五社によって、撮るもののがかなり違いましたよね。

内田 僕らの世代では圧倒的に日活が人気だった。大映映画観ている中学生なんかいないもの。日活ファンは吉永小百合一筋だった。

平川 いや、石原裕次郎ファンもいたし、特に僕らの世代は、なんといっても赤木圭一郎なんですよ。まあ、このころは娯楽なんだけど、高校生や大学生くらいから、深く刺さってくる映画というのがあって。最初の衝撃は、やはり『ウエスト・サイド物語』だった。

内田 僕は一九六二年の夏に観た。公開してから半年くらい経ってたけど、丸の内ピカデリーでまだ上映してた。一年半くらいロングラン上映してたんだよ。

平川 でも、僕が見たのは中学生の後半か、高校生になつてからだった。

内田 僕はリアルタイムで観た。